

令和二年九月一日発行  
通巻二五三号(毎月一回一日発行)

# 京鹿子



9月号

鈴鹿仁名誉主宰追悼特別号

鈴鹿呂仁  
拾掬集 その六十



寄る波に踵返せず夜の秋  
夜の秋余白のままに魚尾たたむ  
一念の空蟬の爪わが浄土  
空蟬の空に描き足す父の顔  
尺貫法の夫との間合ひ海月浮く  
如何とも苦爪は切れず梅雨ごもり

目が合うて生け簀の鱧の仏頂面  
言ひ訳の子は五分と五分西瓜切る  
誘蛾灯論より食の下宿生  
空蟬や聚楽廻りは遺址の道  
夏蝶の飛脚走りに碑を巡る  
累々と出世稲荷の蟬の穴  
ジオラマの京<sup>まち</sup>は丸ごと夕焼けり  
俳句四季九月号  
野葡萄の空は開かず迷ひ道

近詠

和田 照海



蠅取りボン

隠栖の髪切り椅子や濃紫陽花  
勤行に励む無住寺の雨蛙  
皆の灯に加はりてをり端居夫  
回天の島の磯蟹なつき寄る  
船待ちの蠅取りボン古るままに

近詠

松本 鷹根

夏鶯

師を慕ふ夏鶯の風に坐し  
鐵路錆び夾竹桃は傾れ咲く  
滴しぶき雨後の青空神神し  
樹下に椅子日傘たたみて風慕ふ  
夕日染む合歡花風に修身す

— 近 詠 —

塩貝 朱千



## 浮雲

割り切って割り切ってゼロ薔薇の散る  
明け易し寝ぐせの残る浮雲に  
花棟むらさき烟る過去まどひ  
墨いろの蛾を放つ闇訃報来る  
白百合に悴さがす祈りかな

## 英華採集

田を植えて一番星をつれ帰る

福山 石原 孝人

農事に携わる人にとって田を耕すことから始まり田植そして収穫と、それぞれに違った苦勞を持ちながらの作業となるのは当然の事と言えるが、一番苦勞を惜しまずに行う作業は田植であり、田植が終わった時の安堵は一段落を終えた充実感を持つのではないだろうか？掲句の「一番星をつれ帰る」の措辞は、これまで日暮れまで付き合ってくれた一番星に対する「ありがとう」の感謝を込めての精一杯の作者の気持ち溢れている。

鉄線花七重の膝を八重に折る

相生 伊東 淑子

人との付き合いの中には時として菓子折りの一つでも携え相手の家に向き誠心誠意の礼儀を尽くさなければならぬ事があるが、相手の家の玄関先には、毅然とした構えを崩さないように鉄線の花が置かれていたのだろう。来意を告げながらの低身低頭の姿の作者が目につかぶ。「七重の膝を八重に折る」の措辞には、作者の思いが十二分に表れており読み手に伝わってくる。

四方八方噂の飛んで栗花落かな

京都 植田 秀子

噂が広がるのは早いのが常で、悪い噂であれば尚更のことで、「四方八方」は正に悪い噂であり、最近よく耳にするネット上の炎上騒ぎもこの部類であろう。下五に結んだ「栗花落」は「ついで」と読み本来の「梅雨入り」より洒落た言葉である。丁度、栗の花が落ちる頃に梅雨になることを踏まえての気象歳時記に使われ、よくテレビの気象予報で紹介されている。四方八方と栗の花が散らばる様がよく合っている。

月今宵 沼田巴字

天高くバルーン飛び日本海  
老年の一日一日や秋刀魚焼く  
月今宵余命ありせば月旅行  
生涯を顧みすれば石路の花  
秋の蝶残り少なき日を求め

仔猫 丸井巴水

蝙蝠に宙を譲りて軒の巢へ  
緑さす天井川の錆び煉瓦  
終焉の言葉を探す走り梅雨  
捨て仔猫掬ひミイコと名を与へ  
玻璃越しに守宮の腹を二度突く

今年竹 植村蘇星

人の和を醸す塩味豆の飯  
名は心凜々し群咲く杜若  
空青し素心貫く今年竹  
ひとり居と見せむ気骨や更衣  
生かされて想ひは十色夜の秋

恋のいろ 北川孝子

晩節のかすかにゆれし草紅葉  
薄紅葉濡れて一樹は恋のいろ  
花野行く滅びの時は声なさず  
競ふ事なくて歩の合ふ秋日和  
終曲の余韻を醒ます虫しぐれ

おいそれと 直江裕子

木の家の木の引き戸ひく梅雨きざし  
おいそれと変はらぬくらし更衣  
光のつらなる飛翔かつら若葉  
石昌を瞬時にスマホ調べあぐ  
あすばらがすめらんこりいれたすサラダ

八十八夜 高木晶子

常備薬より早く沁む花蜜柑  
都市封鎖山ほどちぎる春キャベツ  
五月晴レモン効かせて逃亡者  
八十八夜八十九夜と続く筥  
指の下活字かくれて蝶生る

夕空へ 伊藤希眸

刀身は桐箱の中梅雨きざす  
青葉闇奥は殿中江戸の址  
あぢさゐは残像といふさう想ふ  
夏月の柳に刺さり昇らざり  
夕空へ糸伝ふごとと蛩とぶ

刹那 奥田筆子

竹皮脱ぐ刹那を拾ふ調律師  
スケボーや道すれすれにつばくらめ  
野鴉の落とす小枇杷の蒙古斑  
台に首のせて時計屋パリー祭  
夏菌禍約束といふ捨て結び

# 神麓集

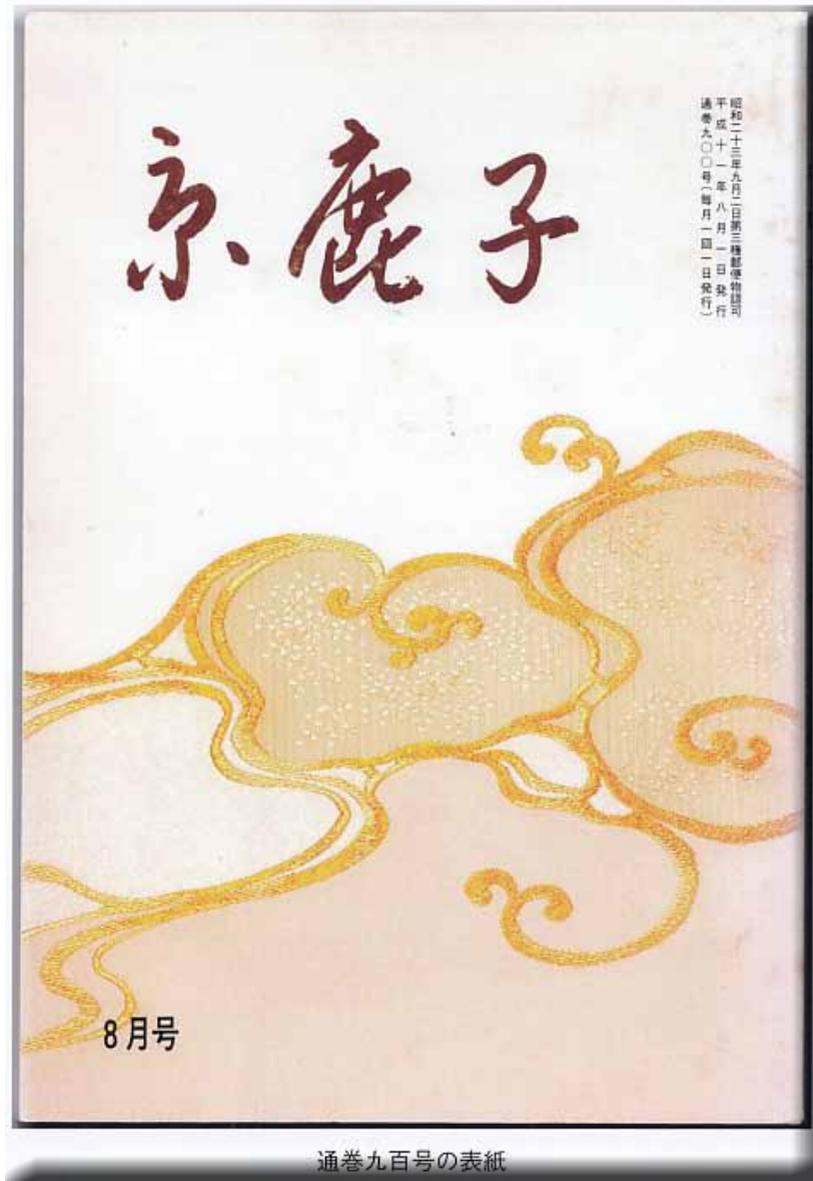
駅ピアノ

井上菜摘子

初恋のあとの幾つか海晩夏  
マンションの全戸の窓の夕焼くる  
はつあきの卵溶く音のみにゐる  
少女にかはり檸檬の匂ふ駅ピアノ  
ピアノ弾き西日に消えしホームレス

白百合 村田あを衣

白百合のマリアに添ひて白極む  
街騒に慣れ墓地よりの黒揚羽  
蛭草西院(サイ)の河原の名残り仏  
今日も又記入の社朝涼し  
青葉風我が町名は淳和院



通巻九百号の表紙



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

黒南風や水軍墓地の文字薄れ

京田辺 山中志津子

ふるさとの追憶紡ぐ山法師

青葉若葉よそよぐのは印象派  
抱擁を解くかげ二つ絮たんぼほ

城陽 鷺山 珀眉

追伸に間に合ふやうに娑羅開く

紫蘭咲くふと雨だれのプレリユード

山百合の香に籠もりあて羽化急ぐ

なみなみと三日見ぬ間の青田風

鷺草を育てて水の星に住む

板塀の長さいつばいまで粟花落

宇治川に佇つ春愁を懐に

京都 井尻 妙子

花は葉に標本木の役終へて

福山 亀井 福恵

グルメ本ダイエツト本夏に入る

蛩舞ふ園たちちねの夜となりぬ

黒南風や子の食べ残すパンの耳

百万本の薔薇を洗ひて雨あがる

青すだれ日にち薬と言ふうれひ

いにしへのジャズを洩らしぬ青簾

投稿は匿名希望蛇の衣

白牡丹一穢の虫を宿しけり

黒南風や丸ごと洗ふ千枚田

福知山 西村 白籽

蛇衣を脱ぐや心の殻を脱ぐ

梅干して光と風を欲しいまま

五月晴会へば解けることばかり

父の日や百姓終りと畦に佇つ

青梅雨やつなぎたき手を求める手

京都 菊池 和子

放心を現に戻す軒風鈴

ひらがなのやうな挨拶山うつぎ

赤ん坊の上手な欠伸七変化

御点前の華著な指先青すだれ

明け易し胸に置く手は妣だより

河鹿笛むねの芯まで蒼みゆく

杜若葉神の詩の滴れり

明け易しモリスのカーテン紫に

仮の世に絹のひびきや河鹿笛

春逝かせ想ひおもひの家居かな

大阪 本郷 公子

賀茂川の源流を訪ふ黒揚羽

川底の風紋ゆらぐ夏柳

終章の余韻さながら夜の新樹

見つめらる牡丹日暮れの吐息かな



田を植ゑて一番星をつれ帰る

福山 石原 孝人

湖焦がす落暉の波や青簾

春愁を風に溶かして忘れ潮

水中花磨き切れざる脳の錆

鉄線花七重の膝を八重に折る

相生 伊東 淑子

柿の花一事が成れば万事成る

優雲華の一輪咲いても花は花

金雀枝や大木の下の小木育つ

四方八方噂の飛んで粟花落かな

枚方 植田 秀子

赤いバラ甘い言葉に落し穴

ホトトギス鳴いてパズルのほどけ出す

あぢさゐの家それぞれの綾をなす

夏の暁散策途の譲り合ひ

片陰や父の想ひ出遡る

待ちわびた産声射貫く初夏の窓

夏座敷おとうと対ふ一歳児

アリンナ 伊吹 之博

## 鈴鹿仁名誉主宰追悼



星

鈴鹿仁

村恋ひの山河はゆたか星祭  
星飛んで失意の闇を深くする  
流星やその曩の距離嬰ねむる  
星合に闇深くする天つ神  
天界へ白寿を継がる師走星  
橋ひとつ渡る寒夜の星うるむ  
三叉路で逢ふも縁や星まつり  
星祭旺ん着倒れ食ひだふれ  
星飛んで失せ物さぐる占ひ師  
節目てふ二字の重さよ星月夜  
十葉のひぐれいろして星を恋ふ  
床涼し一番星の大宇宙  
一番星炎ゆ山暮れの鬼やらひ  
一番星妣にひとこと端居かな  
星ひとつ流れて人の噂消ゆ  
星飛んで山の稜線膨らます  
文月や奥眼の甲冑星を恋ふ  
天窓や夢のふくらむ文月星  
夜這星人の噂を消しにゆく

俳誌のサロン抄